

# 岐阜から考える「歴史総合」

— 高大連携の模索と課題 —

## Exploring the past and present of Gifu prefecture in national and international context: A study of teaching materials for 'Modern and Contemporary History'

田澤晴子<sup>1</sup>, 辻本諭, 古田修一郎, 横山翔太<sup>4</sup>, 新田慶命<sup>5</sup>

TAZAWA Haruko<sup>1</sup>, TSUJIMOTO Satoshi<sup>2</sup>, FURUTA Shuichiro<sup>3</sup>, YOKOYAMA Shota<sup>4</sup>, NITTA Yoshikoto<sup>5</sup>

[キーワード Keyword]	歴史教育, 高大連携, 歴史総合, 地域学習, 岐阜県
[所属 Institution]	<sup>1</sup> 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), <sup>2</sup> 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), <sup>3</sup> 聖マリア女学院高等学校 (St. Mary's Girls' High School), <sup>4</sup> 聖マリア女学院高等学校 (St. Mary's Girls' High School), <sup>5</sup> 岐阜大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Gifu University)

### 1.はじめに

2022年度より本格的に導入される「歴史総合」では、岐阜県の歴史をどのように扱うことができるだろうか。2020年度「地理歴史科教育法II」(3、4年生対象)ではその試みの一つとして、高校教科書とリンクする岐阜県の歴史を各班(4名×6班)で選び、学外調査を経てパワーポイントにより発表し、意見交換するという授業形式をとった。大学院生(修士)1名と教員2名が各回にコメントし、最終回は現役の高校教員(聖マリア女学院高等学校、世界史・日本史担当)からのコメントと学生との質疑応答の時間を取った。発表した内容は以下の通りである。

1班:「長良川と鶴飼」(3年生4名) 2班:「壬申の乱」(3年生4名) 3班:「デレーケと木曾川—お雇い外国人と近代化—」(3年生4名) 4班:「岐阜県の近代化・資本主義の成立—産業史を中心に—」(4年生4名) 5班:「郡上一揆」(4年生4名) 6班:「杉原千畝とホロコースト」(3年生4名)。

本論では、まず「歴史総合」の要点(辻本)を明らかにしたうえで、各班報告の要約、そして報告に対する大学院生(新田)、現役の高等学校教員(古田・横山)、大学教員(辻本・田澤)の見解を掲載し、「歴史総合」における高大連携の可能性を追求する。

### 2.「歴史総合」について

2022年度より、高校地理歴史科の中に「歴史総合」(2単位必修)が新設される。この必修科目の変更(従来は世界史AまたはBが必修であった)は、現在の日本の歴史教育に大きな変化が求められていることのひとつの表れと捉えることができる。以下では、「歴史総合」が設置される前提となった議論(日本学術会議の提言『「歴史総合」に期待されるもの』、2016年5月16日)、2018年に告示された学習指導要領およびその解説と、「歴史総合」について近年多数発表されている学術的な論考を参考にしながら、同科目の目的・内容の要点を確認したい。

#### 2.1.「歴史総合」の目的

2016年5月に発表された日本学術会議の提言では、現行の高校歴史教育が「思考力を培うよりも「知識詰め込み」型に陥る傾向が強い」点、また小中学校の社会科歴史分野が「世界史から切り離して—国史的に日本史を学ぶ傾向が強い」点が問題点として指摘され、それを克服するという観点から新科目「歴史総合」が構想された。ここで目指されるべきは「「世界史」か「日本史」かの二者択一ではなく、グローバルな視野の中で現代世界とそこにおける日本の過去と現在、そして未来を主体的・総合的に考えることを可能にする歴史教育」であり、その実現のため、近現代を中心に学ぶこと、主題学習を重視することなどが方針として示された<sup>2</sup>。

この提言を具体化したものが2018年に告示された学習指導要領である<sup>3</sup>。そこに示されている「歴史総合」の目標を見ると、まず時間軸における学習対象を近現代(18世紀以降)とし、「歴史の変化」と「現在とのつながり」を重視すること、また「世界とそこの中の日本を広く相互的な視野から捉え」ること、すなわち世界史の一部として日本史を位置づけ、両者の比較・関係を検討していくべきことが述べられている。一方、この科目を通じて培われるべき資質・能力として、「諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能」、「歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力」、「考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力」、「課題を主体的に追究、解決しようとする態度」が挙げられている。このように「歴史総合」においては、学習者に主体的な学びを促し、それを通じて然るべき知識の習得と、またその知識を自ら深め活用していく力(思考力・判断力・表現力等)の育成が求められている。

## 2.2. 「歴史総合」の内容

次に、学習指導要領に示されている「歴史総合」の内容を見てみよう。下の表は「歴史総合」の構成(大項目・中項目とその特徴)を簡単にまとめたものである。全体はA~Dの4つのセクションに分けられ、まずA「歴史の扉」では、歴史を学ぶ意味、歴史を考察する方法が検討される。続くB、C、Dでは、それぞれ「近代化」、「国際秩序の変化や大衆化」、「グローバル化」という大テーマが扱われる。このように時系列に沿って3つの大テーマを並べ(B: 18世紀~19世紀後半、C: 20世紀初頭~半ば、D: 20世紀半ば~現在)、各大テーマの中に複数の中テーマを設けるという形をとることで、どのような内容をどの順序で学習するのが緩やかに示されるつくりとなっている。

「歴史総合」の構成に関してもう一つ重要な特徴は、B~Dそれぞれにおいて(学習者による主体的な)問いの設定、課題の追究という学習プロセスが構造的に組み込まれていることである。たとえば、B「近代化と私たち」では、まず1で近代化とは何か、どのような変化が起こったのかを具体的な資料をもとに検討し、学習者に問いを立てさせる(=大テーマの何がどう問題なのかを考えさせる)ことが求められている。続く2、3では、教員が大テーマに含まれる複数の中テーマについて具体的な課題設定と必要な資料提供を行い、学習者はそれら一連の課題に取り組む中で近代化に関する理解を深めていく。以上を踏まえて4では、近代化が「私たち」にとってどのような意味を持っているかが考察され、大テーマと現代世界とのつながりが確認される。

このように、B~Dのすべてにおいて「全体的な問いの設定→中テーマごとに資料に基づく課題の追究→現在との結びつけ」という共通の学習手順・方法が設定されている。これらはいずれも、教員による一方的な知識の教え込みを排し、学習者の主体的な学習を促す工夫と捉えることができるだろう。なお、表に示されている諸テーマのタイトルからも明らかな通り、「歴史総合」では一貫して、世界史の大きな枠組みの中で日本の歴史展開を考えるという視点がとられている。

導入：歴史を学ぶ意味、歴史を考察する方法(=資料)

**A. 歴史の扉**

- (1) 歴史と私たち
- (2) 歴史の特質と資料

**B. 近代化と私たち**

- (1) 近代化への問い
- (2) 結び付く世界と日本の開国 (ア)18世紀のアジアの経済と社会 (イ)工業化と世界市場の形成
- (3) 国民国家と明治維新 (ア)立憲体制と国民国家の形成 (イ)列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容
- (4) 近代化と現代的な諸課題

教員がそれぞれについて課題を設定、資料を用意

**C. 国際秩序の変化や大衆化と私たち**

- (1) 国際秩序の変化や大衆化への問い
- (2) 第一次世界大戦と大衆社会 (ア)総力戦と第一次世界大戦後の国際協調体制 (イ)大衆社会の形成と社会運動の広がり
- (3) 経済危機と第二次世界大戦 (ア)国際協調体制の動揺 (イ)第二次世界大戦後の国際秩序と日本の国際社会への復帰
- (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題

**D. グローバル化と私たち**

- (1) グローバル化への問い
- (2) 冷戦と世界経済 (ア)国際政治の変容 (イ)世界経済の拡大と経済成長下の日本の社会
- (3) 世界秩序の変容と日本 (ア)市場経済の変容と課題 (イ)冷戦終結後の国際政治の変容と課題
- (4) 現代的な諸課題の形成と展望

おおよその時系列 B: 18世紀~19世紀後半 C: 20世紀初頭~半ば D: 20世紀半ば~現在

定められた大テーマについて、資料を基に問いを導く  
導入の問い → 各中項目内に示された「身に付けるべき知識」ごとに課題を設定し、資料を基に追究する

「歴史総合」の全体構成(『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』より筆者 [辻本] 作成)

### 2.3. これからの高校歴史教育に求められるもの

では、「歴史総合」が必修科目として新設されることは、これからの高校歴史教育にとってどのような意味があるのだろうか。上述した科目の目的・内容を踏まえると、さしあたり次の2点を指摘することができるだろう。まず、日本史と世界史の融合的な理解とそれに基づく考察が(これまで以上に)求められるということである。この点はおそらく「歴史総合」にとどまらず、同科目の履修を前提として学習される「日本史探究」

「世界史探究」に関して指摘しうらう。他方、主体的な学習が重視されることにより、指導する教員には各テーマに即した、また学習者のレベル・関心に合致した問い・課題を設定していく豊かな発想力と、それに取り組むための適切な資料の準備、そしてその資料を正確かつ多面的に読み解く専門的な知識・観点が従来にもまして必要になってくると考えられる<sup>4</sup>。いずれの点においても、今後は教員の力量がいつそう問われることになるだろう。なお、高校の教育現場において「歴史総合」への対応は容易でないとの声を筆者（辻本）はよく耳にする。たしかに、担当する教員にかかる負担は重いものがあるが、ここまで見てきたような「歴史総合」の特徴を踏まえるなら、歴史学の学術成果を教材として積極的に取り入れ（必要に応じてわかりやすく加工した上で）活用していくこと、そしてその際に歴史研究者との協働を図っていくことが、有益であり、また教員の負担軽減にもつながると考えられる。筆者としては、「歴史総合」の新設を契機として、歴史分野における高大連携（研究／教育の架橋）が今後さらに活性化し、相利的な成果が生みだされていくことを期待したい<sup>5</sup>。言うまでもなく、高校／大学の4人の教員の協働により行われる本授業もまた、そのような目標を見据えた試みの一つである（辻本）。

### 3.岐阜県を事例とする授業構想

まず地歴科教育法Ⅱ（2020年度後期、3、4年生）における各班の報告内容を紹介する。

#### 1班「長良川と鵜飼」

1班の報告は、岐阜において長い伝統を持つ鵜飼をテーマとする授業提案である。鵜飼の歴史・文化（起源と時代による変化、この漁法のアジアにおける広がり）を、それが営まれてきた地理的・社会的背景（「長良川について」）、また現代における鵜飼の地域遺産としての意義（「長良川鵜飼いと地域のつながり」）にも目を向けながら、多面的に検討する。さらに、長良川、うかいミュージアムでのフィールドワークや、鵜飼文化の伝承活動を行っている「長良川鵜飼文化広場」<sup>6</sup>との交流など、教室での学習を補完する体験的な学びも提案されている。

\*学外実習先：長良川うかいミュージアムとその周辺

#### 2班「壬申の乱」

日本古代史最大の内乱・壬申の乱は岐阜県が舞台の一つである。高校の教科書『詳説日本史B』（山川出版社、2017年版）にも、乱に勝利した大海人皇子が美濃地方の豪族を動員したことが記されている。2班報告では、壬申の乱が『日本書紀』（壬申紀）をもとに説明されてきた内容に対し「それを歴史教育はそのまま鵜呑みにしてしまっていないのか」という問いを掲げ、美濃と深いかかわりのある壬申の乱をとり上げつつ、「史料批判」並びに、「多角的思考」を高校日本史教育においてどのように行うかを考えている。そして「2.壬申の乱の概要」では国際政治の観点から大海人皇子の行動を説明し、「3.大海人の吉野逃亡と計画性」では、大海人皇子の吉野逃亡の計画性（偶発性）に関する論争が日本書紀解釈に起因することを指摘している。「4. 美濃と大海人皇子」では大海人に協力した美濃の豪族、村国男依（むらくにのおより）に関する史蹟や関ヶ原町の不破跡、自害峰、藤古川での戦いなどを実習写真により紹介している。「5. 壬申紀について」は、日本書紀の記述には「史実」と後世の「演出」が含まれていることを述べる（早川万年2009『壬申の乱を読み解く』吉川弘文館参照）。日本書紀の成り立ちを理解した上で教科書の「史実」を確認することにより、「資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解すること、資料を取り扱う際の留意点に気付くこと」が可能になるとしている。

\*学外実習先：各務原市村国神社、関ヶ原町不破跡等

#### 3班「デレーケと木曾川—お雇い外国人と近代化—」

3班の報告は、近世・近代における木曾川と、その治水工事に多大な貢献をしたオランダ人ヨハネス・デ・レーケ（以下デレーケと表記する）をテーマとする授業提案である。はじめに、木曾川およびその流域の地理的特徴と、それに合わせて育まれてきた地域社会のありよう（水害に対応した生活文化）が示され、続いて江戸時代以降の治水工事の歴史が検討される。授業で中心的に扱われるのは、1873年来日し、木曾川を含む各地で近代的な治水工事を手がけたデレーケであり、彼の活動と功績が詳しく跡づけられる。同時に、デレーケが明治政府によって招聘された多数のお雇い外国人のひとりであったことを踏まえて、日本の近代化に果たした彼らの役割を、出身国ごとの違いや当時の日本の国内状況にも目を配りながら考察することを提案している。

\*学外実習先：木曾三川公園とその周辺

#### 4班「岐阜県の近代化・資本主義の成立—産業史を中心に—」

4班は、「近代化」を産業という経済的視角から捉えるため上記のテーマを掲げ、大垣市、岐阜市、各務原市を具体的に検討している。まず大垣市については、1990年代まで繊維産業が中心であることが紹介される。明治期の人口停滞を糸口で大垣城の城下町が商業機能を失った原因（物流方法の河川から鉄道への転換、地震や水害など度重なる自然災害）を示し、大規模な治水工事による水害の克服と、地元資本中心の揖斐川電力設立による近代化と他地域からの繊維産業の進出の様相を具体的な数値で紹介した。次に岐阜市においては、農家の副業であった織物業を取り上げている。大正期の力織機の普及により織物総生産額が増大したこと、一方で戦災により糸が消失し、戦前からの繊維関係者は既製服業へ転向、また満州からの引揚者が「ハルビン街」を形成、荒物雑貨商から古着商、紳士服製造へ転換し、岐阜駅周辺で岐阜織物問屋街が形成された過程など興



味深い歴史が示された。最後に各務原市では軍需産業（航空機）を取り上げている。同地に各務原陸軍飛行場が開設されたのを契機に川崎工業が1923年に各務原工場を開設する。第二次世界大戦中、川崎航空機工業は「飛燕」を製造する一方、アメリカ軍の空襲を受けた。戦後は航空自衛隊岐阜基地となり、工業出荷額は岐阜県第2位の都市になり「岐阜基地航空祭」は来場者数10万人超のビッグイベントであることが紹介された。

\*学外実習先：揖斐川電力（東・西横山発電所）

#### 5班「郡上一揆」

郡上一揆は岐阜県を代表する百姓一揆である。郡上一揆の原因、郡上一揆の流れを概説し、「今まで学習してきた歴史の一面だけではなく、違った見方をすることができるような題材を用いた授業をしたい」とし、独自の論点として「傘連判状」の読み方を挙げる。傘連判状とは、円の中心に向かって一揆関係者が傘状に名前を書き、印鑑等を押したものである。中学校教科書には首謀者を隠すための仕掛けとして説明されているものだが、班ではこの説を否定し「団結の証」としている。それは多額の江戸への出費負担を前提に、仲間から抜けさせない「同調圧力」であるとしている。次に強調している点は一揆の長期的な計画性である。一揆は勘定取締りを行う張元を中心に組織固めを行い、一揆勢の意思統一を図っている。また庄屋帰還阻止運動や歩岐島騒動などでは数千人の大衆動員を行い、郡上郡内各地域で分担して献金を集めて闘争資金としたことを示し、突発的暴動ではないとしている。最後に一揆により藩内が分裂し「ずたずたとった状態」を和らげ人々の融和を図るため、新藩主の青山幸道が夏の盆踊りを奨励したことが郡上踊りの起源であるという説を紹介している。

\*学外実習先：郡上市白山文化博物館等

#### 6班「杉原千畝とホロコースト」

6班の報告は、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって引き起こされたホロコーストと、駐リトアニア領事としてこの大事件に直面し対応に奔走した杉原千畝（岐阜県八百津町出身）をテーマとする授業提案である。前半部では、ユダヤ人の歴史と文化、とくに彼らがヨーロッパで繰り返し迫害を受けてきた点を確認した上で、ナチス政権の下でホロコーストが引き起こされた諸要因と当時のユダヤ人が置かれていた状況が検討される。一方、杉原千畝を扱う後半部では、彼の生涯と活動、とくに迫害を受けたユダヤ人に彼が自らの判断で発給した「命のビザ」が考察の対象となる。「人道主義の観点から社会科というよりも道徳教材として扱われることが多い」杉原の判断と行動を、当時の国際情勢と、日本政府の対ユダヤ人政策の観点を加味して捉え直すことで、複眼的な解釈を導くことが目指される。歴史解釈は道徳的評価とは無関係に（史料にもとづいて批判的に）なされるべきであることを強調する、論争的で意欲的な試みである。

\*学外実習先：杉原千畝記念館

(辻本、田澤)

### 4. 大学院生・高校教員・大学教員による検討と課題

#### 4.1 大学院生

岐阜県の風土を表す言葉に、「飛山濃水」というものがある。岐阜県には、山と川を中心とした豊かな自然があることを表現する言葉である。この言葉から、美濃地方は「水」、すなわち河川が人々の生活において、重要な役割を担っていたことが窺える。本稿においても、「鶴飼」と「デレーケと木曾三川」の二つのテーマで授業が作成されている。『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』の記述に即せば、これらのテーマは「私たちの生活や身近な地域などに見られる諸事象<sup>7)</sup>」に着目したものとと言えるであろう。従来の日本史科目では、郷土の歴史に関する内容が授業の中に組み込まれることは極めて少ない。そのため、地域に着目し、そこから現代や世界へのつながりについて考察することは、新設科目である歴史総合の一つの大きな特徴と言えるであろう。では以下に、それぞれの授業について検討する。

まずは長良川の「鶴飼」についてである<sup>7)</sup>。作成された授業では、全体的に長良川における鶴飼の歴史の長さを主題にしている印象を受ける。確かに史料をたどれば、長良川の鶴飼に1300年の歴史があることは確認できる。しかしながら、もちろん鶴飼は長良川においてのみ行われていたものではない。むしろ人類の歴史上、日本・世界各地で行われてきたきわめて古い源流を持つ漁法である<sup>8)</sup>。したがって、起源をたどることで世界各地に視野が広がる可能性はあるものの、古代あるいは考古の範囲に入っていくことになる。そのため、近現代史が中心となる新科目「歴史総合」で長良川の鶴飼を取り扱うのであれば、その起源を考察するよりも、他の地域では鶴飼が衰退する中でなぜ長良川の鶴飼は現在に至るまで続いているのだろうか、という問いを立てることが有効であると考えられる。現在でも鶴飼の伝統が残る長良川と、既に鶴飼が衰退した他の地域の例を比較することを通して、伝統文化を維持するためには何が必要であるかを探究させることが可能になるであろう。

続いて「デレーケと木曾三川」についてである。まず前提として、長良川をはじめとする木曾三川は、大雨や洪水などによって何度も流路が変化している。鶴飼の話に関連させると、岐阜市における現在の鶴飼の本拠は金華山の麓(岐阜市湊町)である。しかしながら、この地に本拠が移ったのは16世紀頃のことであり、それ以前は岐阜市の西北部に拠点があったと推測されている<sup>9)</sup>。木曾三川については、江戸時代の輪中の話が中心とされることが多いため、意識されることは少ないものの、鶴飼もまた河川の洪水に悩まされていたのである。長良川流域に住む人々と同様に、鶴飼も現在の地に安住・定着するようになったのは、明治時代にオランダ人土木技師デレーケの主導による三川分流工事が行われて以降のことである。

では、授業の内容に触れよう。作成された授業は、いわゆるお雇い外国人の一例としてデレーケを取り上げ、地理的な要素も多く含みながら木曾三川の工事について考察するものである。資料の中で、木曾川の地理的な視点から見た特徴は詳しく触れられている。これを世界と繋げるには、デレーケの故郷であるヨーロッパの河川と日本の河川の比較が必要であろう。デレーケが川筋を直線に近付けながら三川に分流するという考えに至った理由として、日本の河川がヨーロッパの河川に比べて急流であったことが考えられる。またデレーケが河川工事の一環として、植林などによる砂防を重視したことも、一度の雨で川へと流れ出る水量を減らすことや、堤防の強度を上げることが目的であると考えられる。さらに、これらの砂防が後に公園などに整備され、人々の憩いの場にもなっている点は、現在とのつながりを示すものになる。このように、歴史の授業といえども地理的な視点を多く盛り込むこの授業は、新しく必修化される「歴史総合」と「地理総合」が相互補完的な役割を果たすという学習指導要領の記述にも合致していると言える<sup>10</sup>。

以上のように、郷土である岐阜の歴史を題材として、現在とのつながりや世界との比較を通じた考察をするという授業は、新科目「歴史総合」の登場によって、従来よりも実現可能性が高くなったような印象を受ける。ただし問題点として、授業作成者側が郷土の歴史について学んできていない可能性が高いという点が挙げられる。したがって、学校現場で郷土の歴史を題材として扱うには、大学教員や学芸員といった人々との連携や、副教材としての郷土史資料集が必要になってくるであろう（新田）。

## 4.2. 高校教員（世界史）

2022年度より、高校の地理歴史で新科目「歴史総合」がはじまる。長い間、高校での歴史学習においては「世界史」「日本史」という枠組みで学習がなされてきた<sup>11</sup>。しかし、大学受験という現実の問題の前に、高校生は「世界史」あるいは「日本史」のどちらかを「選択」し、「選択」されなかった方の歴史科目は、自然学びの対象から外れていく、という経路をたどるケースがほとんどというのが、現場の教員の実感である。教員の中でも「〇〇先生は日本史が専門で、世界史は△△先生が専門」というケースは少なくない。そうした点から、「歴史総合」が歴史教育における理想に近づくためのマイルストーンとなることを期待する向きもある<sup>12</sup>。

今回の実践では各授業案について現職の高校教員という立場から論じていきたい。

まず「長良川と鵜飼」であるが、岐阜県で学ぶ高校生にとって「長良川」「鵜飼」というキーワードは、なじみ深いものだと思う。その点において、学習に取り掛かりやすい題材である。一方で「歴史総合」という近現代を扱うという科目特性から考えた場合、織田信長などの権力者と「鵜飼」の関係など近現代以前の内容を深く扱うというのは、検討の余地があると思われる。提案の中にも言及されていたが、「鵜飼」を観光資源として切り込んでいくのならば、「地理総合」の中でより生きてくる題材なのかもしれない。「歴史総合」という科目の中で扱うならば、「グローバル化と私たち」に関連させて、「長良川鵜飼文化をユネスコ無形文化遺産に登録してもらえようプレゼンを作ってみよう」といった大枠の課題を投げかけて、各グループでプレゼンを作成するのも有効だろう。あるいは実際に岐阜市の文化財保護行政について調べさせるのも一案だ。実際、1975年の文化財保護法の改正以降、岐阜市は「長良川鵜飼文化のユネスコ無形文化遺産登録」を目指し、文化財保護行政を行っている<sup>13</sup>。グローバル化が進み、「文化の多様性」が訴えられるようになって久しいが、地域の独自の伝統文化をめぐる行政の取り組みについて、生徒自身がアプローチをする経験があってもいい。

次に「近代化と資本主義の成立」であるが、「歴史総合」の「近代化と私たち」という項目にあたる内容になっているという印象を受けた。大垣市をはじめとする西濃地域の産業の歴史にスポットを当てていたが、わたくし自身も東横山発電所・西横山発電所を授業内で扱ったことがある。現在も西濃地域の産業において大きな位置を占めるイビデン株式会社の歴史を知ること、日本の近代化の推移を学ぶことができると感じている。1916年に繊維工業の出荷額が大垣の工業生産額の84%に達していたことに触れていたが、さらにその先の時代に、揖斐川電力が養老鉄道を合併したことなど、日本の産業の近代化の推移をつかむ素材になると感じた<sup>14</sup>。

今回授業提案者が大垣市、岐阜市、各務原市の産業史といった地域史へのアプローチをする中で、素材としたであろう自治体史については、「歴史総合」の授業においても大きなポイントになると考える。「歴史総合」では、「諸資料の活用」についても言及されているが地域史を扱う場合には、欠かせないものだと考える。ただ高校生にとって、自治体史は読むだけでも難易度は高い。教員の側が資料の精選をすることも必要であるが、時間的な制約もあり、実際に教材化するための超えるべきハードルは高いと言わざるを得ない。現職の教員の立場で教材化しやすいという点では、岐阜県史における『わかりやすい岐阜県史』や、大垣市史における『図説 大垣市史』のようなビジュアル版を挙げたい。そうしたビジュアル版の自治体史がより多くの自治体で発行され、各高校に備えられているという状況が理想である。

最後に「杉原千叟とホロコースト」について論じたい。この授業提案は「歴史総合」の目標(2)を意識したもので、内容の(3)の「国際協調体制の動揺を理解する」にあたるということであった。提案にもあったように、第一次世界大戦から第二次世界大戦までの日本とその他の国々との関連付けができる内容であるので、「多面的・多角的な考察」を十分達成できる内容であると感じた。それ以上に興味深かったのは、「杉原千叟像」について考えさせるといった点である。現職の教員の立場からすると、従来知られている「杉原千叟像」に疑問を投げかけるというのは、率直に言って二の足を踏んでしまう。提案者も指摘していたが、わたくしが勤務する高校においても、道徳的な学びのなかで「杉原千叟像」が形成さ

れている。かつては総合学習の中で、「命の尊厳」というテーマで杉原千畝記念館を訪れたこともあった。そうした歴史の授業以外で、「杉原千畝像」が形成されていることから、そこにあえて疑問を問いかけるというのは、挑戦的な内容である。

一方で、勤務校の教員ではなく、地歴科の教員として見た場合は、十分に実践する価値のある授業提案だと考える。というのも、「多面的な見方」を身につけるためには、うってつけの素材だと感じたからだ。おそらく高校生の中でも、「杉原千畝像」について意見が分かれるであろうが、異なる意見を交流することで、まさに「多面的な見方」を養うことができると考える（古田）。

### 4.3. 高校教員（日本史）

#### 2班 壬申の乱

教科書の記述は非常によくまとまっているが、その記述がすべてといった認識を持たせることも好ましくはない。古代における資料、特に文字資料は日本書紀と古事記の記述が主であり、それらの記述を批判的にみることは非常に重要である。歴史には様々な見方や考え方があることを、どの時代を学ぶ上でも大切にすべきである。この資料批判を授業で取り上げようとする、理想としては同時代の一次資料を提示すると、根拠をもって批判ができると思われる。ただ、壬申の乱発生時期の一次資料はなかなかないため、ひとつの方法としてはどのような資料があると良いかといったことを考えさせることも、生徒が自由に考えることが出来て効果的であるかもしれない。また、この壬申の乱の記述は岐阜県が登場する部分が多く、そのゆかりの地を教員が提示しながら進めていくことで、生徒がより身近に感じることができ、資料のみと向き合うよりも前向きな学習となると思われる。生徒は、身近な話題や知っているものとなつた時に顕著に興味を示すため、地域性を盛り込むことは非常に重要である。このように授業を進める過程で、資料の記述と教科書の記述が重なる部分に気づき、資料に基づいて歴史が叙述されていることも実感でき、根拠に基づく記述の重要性が再認識できるはずだ。今回の起点となる壬申の乱は、教科書では必ず登場する出来事であり、取り扱うことは十分可能であると思われる。

#### 3班 デレーケと木曾川

まず治水という話題は、特に木曾三川流域の地域において小学校の社会で取り扱われており、導入しやすい。この学習をより効果的なものにするためには、地理の予備知識が必要不可欠であると思われる。洪水がおきやすい地形はどのようなものか、そして濃尾平野はどのような土地なのか、これを正確にとらえる必要がある。理想的には、こちらも新設科目の地理総合を先行して学習し、その知識をベースにして学習できると良い。この点は各校におけるカリキュラムとの兼ね合いがあるため、現実的ではないが、ぜひ取り組んでみたい。宝暦治水は江戸時代、デレーケは明治時代と時代が少し空いている。テーマ学習として一気に取り扱うことも考えられるが、通史の中でそれぞれ取り扱い、最後にまとめとして振り返ることが現実的な運用手段と思われる。宝暦治水は江戸時代における新田開発の弊害として、デレーケは富国強兵策の中のお雇い外国人として、通史との関連性も深い。木曾三川というひとつの着眼点を持ち続けて歴史を学ぶことで、学習に一貫性を持たせることもできる。また、お雇い外国人を出身国別に分けて考えることも非常に興味深い。どのような分野で雇用されているのかといった点に、国別で着目することで、当時の日本が外国技術をどのように認識していたかがわかる。また、当時の世界における各分野をリードする国について知ることができ、歴史総合の肝である日本史と世界史を融合した理想的な学習となると思われる。この話題については先にも触れたように、カリキュラムの問題があるが、地理的な要素と世界史的な要素をすべて網羅できる内容であり、実際の現場でもぜひ挑戦してみたい。

#### 5班 郡上一揆

傘連判状は教科書や資料集に掲載されており、江戸時代における百姓一揆のところで私も必ず取り上げる。首謀者を隠すために環状になっている点は知っていたが、印の有無に着目して百姓たちの内情に一步踏み込むことはとても興味深い。通史として表面的な取り扱いのみであると、百姓と権力者の対立構造のみに目が行きがちである。百姓をひとくりにして皆同じ気持ちであったという誤解を与えかねない。冷静に考えれば、皆が同じ思いであることは現代の感覚としてもほぼありえないことで、単純化された対立軸を安易に受け入れないことの大切さを生徒たちに実感させるいい機会になると思われる。人口の大半を占めていた百姓たちの多様な姿を知ることは、今日の多様性を見つめる上で非常に重要なことである。また、この一揆の一因である検見法と定免法について考えることも、効果的であると思われる。直前の享保の改革では、年貢増徴のための政策として定免法が取り上げられているが、その約10年後の郡上一揆では年貢増徴のための政策として検見法を採用したことが、一見矛盾していることにも着目させたい。為政者の政策の意図について考えることも、生徒たちにはぜひ体験させたい。この郡上一揆に関しては、通史の内容と関連させながら、資料を踏み込んで読み取ることで学習できる。郡上一揆の内容をどこまで詳しく掘り下げるかは検討の余地があるが、取り上げるに値する内容であると思われる（横山）。

### 4.4. 大学教員（西洋史）

3にまとめた6つの報告は、いずれも岐阜に関わるテーマに注目し、また「歴史総合」（あるいはこの新設科目に象徴される近年の歴史教育の動向）を念頭に置きながら、高校において実践しうる歴史授業を構想したものである。以下では、筆者（辻本）が6つの報告から感じた成果と課題を



2つずつ、主に「歴史総合」の目的・内容と関わらせて論じてみたい。

**【成果I】 テーマを空間／分野横断的に考察する**

まず6つの報告に共通して指摘できるのは、それぞれが各テーマを空間／分野横断的に検討している点である。空間面に関して言えば、歴史は扱う地理的範囲の広狭によって大まかに「世界史—日本史—地域史」に区分されるが、すべての報告がこのうちの少なくとも2層にまたがる考察を行っていた<sup>15</sup>。たとえば1班の報告では、鶺鴒という岐阜の地域文化の歴史が日本史の動向と結びつけて語られ、同時に類似の文化が中国、インド、ベトナムなどアジアに共通して見られる(た)点が指摘されている。ここには、地元(=私たちの)地域を、日本さらにはアジアという広域的な枠組みの中で捉えようとする積極的な意図を見て取ることができる。同様の試みは、美濃を舞台とする壬申の乱を古代東アジアの国際関係という文脈を交えて理解しようとする2班の報告や、木曾川の治水を明治日本の近代化およびそれを支えた外国人材と結びつける3班の報告、また岐阜の「偉人」杉原千畝を介して日本史とヨーロッパ史を接合しようとする6班の報告においてもなされている。これらはいずれも、「世界との中の日本〔/地域〕を広く相互的な視野から捉え」ようとする「歴史総合」の視点を具体化する試みと言えるだろう。

分野横断という点に関しては、多くの報告で地理的な観点からの検討がなされていたことが印象的であった。たとえば1班と3班の報告では、長良川という自然環境とそれに適応した地域の人びとの生活が詳しく扱われ、4班の報告では、岐阜県内の諸都市における産業史が、地形、人口、交通、政治・経済情勢などの面から分析されている。一方、2班の報告においても、古代において美濃国が畿内と東国を結ぶ交通の要衝であったこと、そしてその地政学的重要性ゆえに壬申の乱がこの地で戦われたということが説明されている。なお、2018年告示の学習指導要領解説には、「歴史総合」が「地理歴史科に属する科目であり、地理学習との関連を図る必要がある」こと、「必修科目「地理総合」や中学校社会科地理的分野との関連を十分に踏まえるよう留意」すべきことが書かれている<sup>16</sup>。上記の報告はこの点を踏まえて構想されたものと評価することができるだろう。

**【成果II】 複数の解釈を追求する**

もう一つの成果として指摘したいのは、6つの報告のうちの多くが、歴史解釈を固定的なものとして捉えず、多様な史料や文献を参照しながら複数の解釈を追求しようと試みていた点である。たとえば2班の報告では、主要史料である『日本書紀』の性格とその記述に内在するバイアスが示され、それを踏まえた上で読み解いていく必要性が示されている。また6班の報告では、「人道主義者」「偉人」としての一面的な杉原千畝像に疑問を投げかけ、日本政府の立場にも目を向けることで彼の判断・行動を捉え直す可能性が提起されている(ただしその際には、関連研究・史料の十分な検討が求められる)。歴史解釈が多様であり流動的であることは歴史学における常識であるが、この認識が歴史教育においても共有され、上記の2報告のように歴史解釈の不確実性自体を正面から取り上げる授業が今後積極的に実践されることを期待したい。そうした取り組みを通じてこそ、学習者にとって歴史教育は、過去の事象を自ら解釈していく主体的で想像／創造的な学びとして(既定の知識を覚えるだけの単純作業などではなく!)経験されるはずだからである。

**【課題I】 現在と関連つけて歴史を理解する**

次に課題点に移ろう。2.で見たように、「歴史総合」では、歴史を現在と切り離して(=他人事として)理解するのではなく、「(現代に生きる)私たち」と関連つけて(=自分事として)理解する姿勢が貫かれている。しかし、この点が明確に示されていた(と筆者が感じられた)報告は少数であった(ただし1班の報告では、現代における鶺鴒文化の保護・継承について考えることを授業のねらいに掲げていた)。各報告をめぐるディスカッションでもたびたび議論になっていたように、歴史教育の現場ではいかにして学習者に主体的な関心を持たせるか/学習に意義を見出させるかが重要な問題である。現在をよりよく理解する/未来をよりよいものにするために過去を探るというアプローチはこの問題に対する有力な解決策となりうるはずで、この点の改善が第一の課題として指摘できるだろう。

**【課題II】 大きな物語の中に個別のテーマを位置づける**

もう一つの課題点として、ほぼすべての報告が個々のテーマ史にとどまり、科目(たとえば「歴史総合」)全体の中でどのような位置づけが与えられるのが必ずしも明らかでなかった点が挙げられる。成果IIで述べたこととも関わるが、歴史は過去の事実の単なる寄せ集めではなく、語り手が自らの判断でいくつもの事実に意味づけを与えながら叙述するストーリーである。そこには、何に注目するのか、またそれをどのように解釈するのかという語り手自身の価値観が含まれる。「歴史総合」に関して言えば、近現代世界の中の日本を、「近代化」「国際秩序の変化や大衆化」「グローバル化」という3つの観点から説明・解釈することが求められている。とすれば、実際に授業化をする際には、この大きな物語の中で、取り上げる各テーマにどのような役割を担わせるのかを(他のテーマとのバランスも含めて)明確にする必要があるだろう。「大きな輪郭と意味ある細部(great outline and significant detail)」とは、18世紀イギリス政治史の碩学ルイス・ネイミア(1888~1960年)が歴史研究者の心得として説いた有名な言葉であるが<sup>17</sup>、同じことは今後歴史教育においても少なくとも「歴史総合」(=大きな物語の筋立てがあらかじめ定められている一方、取り上げる題材や資料、学習者に提示する課題といった細部については教員の裁量に委ねられている)においては—いっそう求められることになるのではないだろうか(辻本)。

**4.5. 大学教員(日本史)**

今回の授業報告で取り上げられた岐阜県の歴史事例は、3つのパターンに分けられる。①歴史教科書に掲載されている事件や事項のうち、岐阜県を舞台とする内容をテーマとしているものである。壬申の乱、百姓一揆（郡上一揆）、杉原千畝などがそれにあたる。これらのテーマは教科書の内容に即している点で、取り組みやすく資料も豊富である。②教科書で取り上げられたテーマを地域の事例に落とし込む内容で、岐阜県の近代化・資本主義の成立、デレーケと木曾三川治水事業がそれにあたる。教科書に具体的な内容が示されているわけではないため、①に比べると教員・生徒共に調査すべき内容が多く、また関連する自治体史の活用が必須である。前述の古田コメントにあるように一般向けのビジュアル版のある場合は別として、難解な文章を読みこなすなどの史料読解に取り組む必要がある。③学習指導要領に掲載されている項目に沿う内容で、長良川鵜飼についての報告が該当する（地域固有の伝統文化の探求）。歴史教科書に掲載されていないものの、岐阜県内の小学校社会や総合的な学習の時間に取上げられる可能性が高いものである。また季節の風物詩として定期的に報道される機会があり、県内居住者であれば誰もが何となく知っている内容でもある。

次にそれぞれのパターンの地域史（文化史）を高等学校歴史教育で扱う利点と問題、大学教育における課題について記しておきたい。①は、地域の歴史のなかでも全国的知名度が高く、「郷土の誇り」として取り上げられる可能性の高いものである。壬申の乱においては古代史における美濃豪族の役割の重要性、郡上一揆においては幕府をゆるがした郡上の民衆闘争のねばり強さや組織力、杉原千畝においては迫害されるユダヤ人を救った岐阜出身のヒーロー、といったように。これらのテーマは岐阜県内の博物館や図書館などの公共施設で内容を掘下げた企画展や講演会が生まれ、マスコミ等でニュースになりやすい。また、県内の該当地域が観光ルートになっている場合もある。その気になれば学習の機会が豊富で、博物館や図書館などの協力も得やすい。通常の授業としてだけでなく社会科見学、長期休暇の課題などとしても提示しやすく立体的な学習が可能になるものといえよう。一方、高校までの学習においては批判的な視点による考察が困難なテーマでもある。「郷土の誇り」の事例は、道徳教育の素材として活用されることが多く、古田、横山のコメントにあるように杉原千畝の人格の称揚、郡上一揆における一枚岩の百姓たちの意志への称賛などが価値的に捉えられている場合がある。同じ教育の場において道徳教科で高く評価しながら、歴史教育で批判的に考察するのは授業を受ける生徒の側に思考の混乱を招きかねない。

こうした既存の価値に対する批判や史料の批判的考察は、高等教育ではなく大学教育の場がふさわしいと考える。大学教育では、高校まで「正しい」とされてきた価値観を俎上に載せ真偽そのものを問うこと、多様な価値観に触れて自身の価値意識を相対化することが課題の一つとなっているからである。今回の学生の報告でも従来の認識や価値観を問う内容が盛り込まれていたことが印象深い。①を批判的に検討した後で改めて教科書の内容に取り組むことは、将来教員となる大学生の視野を拡大させ、教科書とは何かを考えるための素材を提供することになるだろう。

②は、教科書内容の地域的展開を検討するもので、教科書に示された展開をスタンダードとして岐阜県の事例を比較検討することになる。例えば日本史の教科書では軽工業の発展→重工業の発展→軍需産業の発展という順番で日本の産業が「発展」していくことが示されている。ところが、「岐阜県の近代化と資本主義」の内容をみると、教科書に示される時系列があてはまっていないことに気づく。岐阜県の場合、地震や洪水などの災害を主な原因として明治期の産業発達が進まず、第一次世界大戦前後を中心として繊維工業、織物業、軍需産業が一気に興隆し戦後へと展開していくのである。このような発展の仕方をどのように捉え位置づけるのかは教員自身が考察する必要がある。今回の報告のように大垣市、岐阜市、各務原市の事例の場合、各々の自治体史に県内の産業全体における位置づけが記されているのはまれで、たとえ記されていても「正解」であるかは別問題である。地域史に分け入ることは、様々な「解釈」を可能にする歴史学の森に入っていくようなものであり、教科書の図式を相対化するような思考が必要になってくるのである。そのため「歴史総合」における歴史教育の技法を身につけるために、教育系の学部でも地域史の研究方法を実践する機会を設けることが必要になってくる。高校教育の段階で断片的に調べた内容を発展させるような大学授業が要請されているといえるだろう。

③は、①と共通する「郷土の誇り」としての側面と②と共通する地域特有の文化としての側面がある。「長良川鵜飼」というテーマは、行政やマスコミの影響もあり「郷土の誇り」となるべき文化であることが自明の前提とされている。資料や動画も豊富にあるため、①と同様に調べ学習に適しているし、現在も行われている文化であるため、行政、観光業、鵜飼、それぞれの関係者の人々にインタビューすることで伝承や保存の大切さを実感することもできるだろう。

しかし本報告の際「長良川鵜飼の近所に住んでいたが鵜飼の内容を本日初めて知った」という発言が複数あがったように、鵜飼文化を自分たちのものと認識している県民はどれだけのいるのか、「有名」であるから伝承すべき文化と認識しているに過ぎないのではないかという疑問が大学生になれば生じる。「伝統」や「文化」というと大切にすべきものだという条件反射を大学教育ではいったん止め、観光資源としての「文化」と地域共同体で守っている「文化」の違いは何か、また「文化」とは何のためにまた誰のためにあるのかを考えることが必要である。また前述の新田コメントにあるように他地域で衰退したのに長良川で鵜飼は盛んな理由などの比較考察を地理学や考古学、民俗学における研究を参照しながら実施する方法を講じる必要がある。以上のように「歴史総合」において地域の歴史文化をテーマに掲げることは、高校と大学それぞれの教育の特徴を生かしつつ、教授方法や素材の取り上げ方において連携しながら進めることで一定の効果が見込まれるものといえよう（田澤）。



- <sup>1</sup> 「歴史総合」については、近年複数の学術誌において特集が組まれ、多くの論考が発表されている。たとえば、『社会科教育』717号(2019年1月)【特集】世界と日本が融合する「歴史総合」授業デザイン;同739号(2020年11月)【特集】今押さえない!これから求められる歴史授業;『歴史評論』828号(2019年4月)【特集】歴史教育の「転機」にどう向き合うか;『史潮』85号(2019年6月)【小特集】いま「歴史総合」を考える;同87号(2020年6月)【小特集】第二回「歴史総合」シンポジウム:「近代化」の論じ方—明治維新と世界;『学術の動向』24巻11号(2019年11月)【特集】地理総合と歴史総合:何が変わるのか、どう向き合うのかなど。また、藤原健剛「「歴史総合」実施に向けての期待と課題—「歴史総合」の理想を形にするために」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書(2019年度)』(2020年3月)、13-22頁も参照。
- <sup>2</sup> 日本学術会議 史学委員会 高校歴史教育に関する分科会「提言「歴史総合」に期待されるもの」(2016年5月16日)、ii-iii頁。
- <sup>3</sup> 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』(2018年7月)123-190頁。
- <sup>4</sup> この点について葦塚雄一氏は、「これまでの「教える」授業から、生徒の思考を深めるための資料や発問を「コーディネートする」授業への転換が求められる」と指摘している。葦塚雄一「学習課題の考察で、「教える」授業から「コーディネートする」授業へ」『社会科教育』717号(2019年1月)18-21頁。
- <sup>5</sup> このような問題意識のもと、筆者はこれまでにいくつかの(中)高大連携の取り組みに加わってきた。たとえば、田澤晴子・辻本諭・古田修一郎・早川万年「高大連携の視点からみた歴史学習の課題」『岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)』66巻2号(2018年3月)19-26頁;田中伸・辻本諭・前田佳洋・矢島徳宗「教師・歴史学者・社会科教育学者が協働した授業のゲートキーピング—歴史学の思考・方法を活用した解釈を主体とする歴史教育実践」同67巻1号(2018年10月)41-52頁;辻本諭・田中伸・三浦寛之「教師・歴史学者・社会科教育学者が協働した授業のゲートキーピング(2)—P4Cを用いた歴史教育実践:移民を考える」同69巻2号(2021年3月)23-32頁。
- <sup>6</sup> 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』136頁。
- <sup>7</sup> 一般的に長良川の鶴飼とは、岐阜市長良と関市小瀬で行われるものを示している(可児弘明著『鶴飼-よみがえる民族と伝承-』中公新書 1966年78頁)。
- <sup>8</sup> 可児弘明前掲書 4~14頁、『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』1980年 827~836頁。
- <sup>9</sup> 片野温著『長良川の鶴飼』岐阜市企業部観光課 1953年 12~15頁、可児弘明前掲書 79~80頁。
- <sup>10</sup> 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』123頁。
- <sup>11</sup> 野崎雅秀『これからの「歴史教育法」』山川出版社2017年、125頁。
- <sup>12</sup> 藤原健剛「「歴史総合」実施に向けての期待と課題 —「歴史総合」の理想を形にするために—」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書(2019年度)』2020年3月。
- <sup>13</sup> 岐阜市『岐阜市史通史編 現代II 上巻』2019年、28~29頁。
- <sup>14</sup> 大垣市『大垣市史通史編 近現代』2013年、337~338頁。
- <sup>15</sup> この3層を横断する授業を構想する上で、兵庫県教育委員会編『世界と日本』(兵庫県版高等学校地理歴史科用副読本、2016年3月)は大いに参考になる。たとえば、同書第2章「世界の一体化と日本」に含まれる「鉄砲の伝来」の項目では、1.「大航海時代」と「世界の一体化」、2.日本とのつながり~南蛮貿易~, 3. 兵庫とのつながり~鉄砲鍛冶と「千種鉄」~のように、世界-日本-地域の3つの空間レベルで説明がなされている。同書ではまた、項目ごとに「中学校教科書では」のセクションが設けられ、中学校の学習内容が簡潔にまとめられている。このように、教材内において中-高-大の学習内容を相互に接続する工夫は(過去の学習段階の内容を振り返るものばかりでなく、次の学習段階の内容を先取りするようなものも含めて)もっとなされてもよいように思われる。
- <sup>16</sup> 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』187頁。
- <sup>17</sup> 近藤和彦「修正主義をこえて」(史学会編『歴史学の最前線』東京大学出版会、2004年、所収)、115頁。

